

## 形容詞的ふるまいをする「名詞+の」について

神崎 享子 馬 青 井佐原 均

郵政省通信総合研究所 関西先端研究センター

{kanzaki|qma|isahara}@crl.go.jp

### 1. はじめに

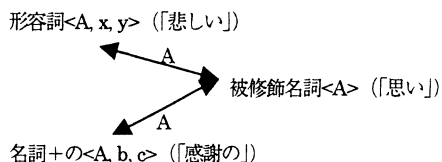
本研究は、連体修飾要素の意味的なふるまいを体系的に把握することを目的としている。連体修飾要素のうち、節についてはこれまで多様な意味関係の分析が進められている(寺村 1991, Matsumoto 1997)。Matsumoto 1997では、連体修飾節だけでなく、連体修飾語句も範囲に含めて、統語的な判断ができず語用論的な解釈を必要とする連体修飾関係を扱っている。本研究の分析では、形容詞、形容動詞、「名詞+の」、連体詞などの連体修飾語句を扱う。これら連体修飾要素に、全体として、意味的にどのような役割分担(表現の分担)があるのかを探る。これまで連体用法の形容詞の意味的なふるまいについては調査、分析を行ってきた(神崎・井佐原 1999, Isahara & Kanzaki 1999)。そこで形容詞と被修飾名詞との意味関係の分析結果を利用して、形容詞的表現をもとに、「名詞+の」の形容詞と類似する意味的なふるまいについて調査分析する。

「名詞+の」の意味関係は、形容詞の意味関係より更に多岐に渡り、様々な立場で「名詞+の」と被修飾名詞の分析が行われている(島津 1986, 黒橋 1999)。本研究では、多様な意味関係を示す「名詞+の」のうち、形容詞と意味的なふるまいが類似する「名詞+の」とは何かを探る。また、同時に、名詞の意味を体系的に捉えるために、連体修飾要素からみた被修飾名詞の意味マップの構築を試みている。これは、自己組織型神経回路網モデルを利用して名詞の意味的な性格の親疎に応じてマップ上に分布させたものである。

本稿では、名詞の意味マップの構築と、形容詞的なふるまいをする「名詞+の」の分析について述べる。

### 2. 対象とする連体修飾関係

連体修飾関係の中には、連体修飾要素が被修飾名詞の具体的内容を表すタイプのものがある。たとえば、「悲しい思い」では、「悲しい」は「思い」の具体的内容になっている。逆にいえば、被修飾名詞は、連体修飾要素の表す事柄を抽象化した意味をもつ。この場合、互いにある意味要素を共有していると考えられる。例えば、「思い」は「悲しい」を抽象化した意味をもち、「悲しい」は「思い」を具体化した表現で、互いに、〈思い〉という意味要素を共有している。「名詞+の」の場合でも、同様の意味関係を示すものがある。「感謝の思い」の例では、「悲しい思い」と同様に、「感謝の」は「思い」の具体的表現であり、意味要素を共有している。この意味関係を図示すると、次のようになる。



このような意味関係を毎日新聞 94 年、95 年の 2 年分のコーパスから取り出した。現段階では被修飾名詞の異なる数は 60 語で、連体修飾要素の総数は 4800 語である。

### 3. 形容詞からみた被修飾名詞の意味体系

#### —自己組織型神経回路網モデルによる意味マップの構築—

#### 3.1 自己組織型神経回路網モデルによる意味マップ

本調査で扱う連体修飾関係のタイプを被修飾名詞の側からみると、被修飾名詞は、形容詞によって具体化が可能な抽象的意味を表す。つまり、形容詞によって表現可能な世界を被修飾名詞が表すことになる。そこで、形容詞からみた被修飾名詞を体系的に把握することを試みる。

実際の作業過程として、類似した修飾語群のセットを取り出す必要があり、そのためには、連体修飾要素群と一つの被修飾名詞の個別的な共起リストを、類似の修飾語群をもつ被修飾名詞どうしを近い位置にまとめた共起リストにしなければならなかった。この計算機処理方法として、類似する修飾語群に基づく分類というだけであれば、クラスタリングも有効である。しかし、クラスタリングの場合は、類似した語ごとに分類することは可能であるが、各分類項目間の関係が直感的にわかりづらい。そこで、被修飾名詞どうしの全体的、有機的な結びつきを反映するために、自己組織型神経回路網モデルを用い、意味マップを構築する(詳細は馬ら 2000)。

自己組織型神経回路網モデルによる意味マップは、語どうしの類似性に応じて、類似する語どうしは隣接するなどしてマップ上にグループを作る。神経回路網モデルの場合、語の類似性というのは、入力語自身の意味が直接反映されているのではない。入力語にはそれぞれの語を特徴づける内部表現があり、その内部表現の類似度が計算される(Hahn & Chater 1997)。本研究の場合もまた、被修飾名詞の類似性は、被修飾名詞自身の意味から判断されるのではない。各被修飾語と共起している連体修飾語群が、被修飾名詞の定義となっている。つまり、連体修飾語群によって、被修飾名詞の意味的な性格を決めているのである。

#### 3.2 対象とする被修飾名詞について

今回、対象とした被修飾名詞は 60 語である。データ作成は途中段階であるので、今後、扱う被修飾名詞は増加し、また、データが増えることによって意味マップ上の被修飾名詞の位置付けも異なってくるかと考えられる。次に示す意味マップは、最終結果ではなく現状の中間報告である。これら被修飾名詞のうち、連体修飾語の性格が明らかに異なる場合は、番号をふってわけた。たとえば、「常識はずれのところがある」「穏やかなところが長所だ」などと、「ぎりぎりのところだ」「計画中のところだ」などの場合は、連体修飾語群の性格が異なるので、「ところ 1」「ところ 2」などとして区別しておく。

### 3.3 意味マップ

次に意味マップを提示する(図1)。連体修飾語群から被修飾名詞の分布の特徴をみると、7つの領域に大別される(図2)。この領域を本稿では「表現領域」と呼ぶ。以下に各領域を概説する。

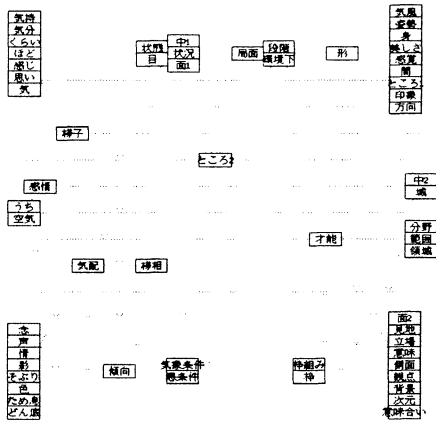


図1 被修飾名詞の意味マップ

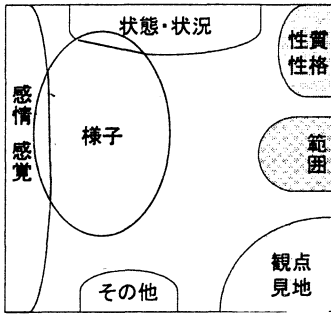


図2 類似した被修飾名詞のグループ

<感情・感覚: 気持 気分 感じ 気 感情 うち 念 声 情 影 そぶり 色 ため息 どん底 など>

まず、<感情・感覚>を表す領域がある。この領域の連体修飾関係は、「悲しい思い」「拍子抜けの気分」「疲労の色」などの感情や感覚を表す表現である。この領域の中でも被修飾名詞の分布が広がっている。「念」「情」「ため息」などを修飾するものは、形容詞が少なく感情を表す「名詞+の」が多いため「気持」「気分」「思い」と離れてしまっていると考えられる。被修飾名詞の傾向としては、「気持」「気分」「思い」などの内面的感情の表現と、「声」「そぶり」「色」「ため息」など、感情を表に出す場合の表現が分離されている。

<状態・状況: 状態 目 中1 状況 面1 局面 段階 環境下 など>

<状態・状況>の表現領域には、「無意識の状態」「ひどい目にあう」「忙しい中」「有利な局面」「なしくずしの形」などの連体修飾関係がみられる。隣接するのは<感情・感覚><性質・性格>の表現領域であるが、被修飾名詞「形」が<性質・性格>のグループに近い位置にある。これは、被修飾名詞「形」が、「孤立無援の形で解任され…」のように状態、状況を表すだけではなく、「正式な形」「最善の形」など、特徴ともとれるような表現も含むため、「形」が<性質・性格>よりも位置していると考えられる。「ところ2」が中央部に離れているが、表現としては「土壇場のところ」「あぶないところ」など状態、状況を表しているが、この位置に意味があるかもしれないので、解釈を保留しておく。

<性質・性格: 気風 姿勢 身 美しさ 感覚 間 ところ 1 印象 方向 など>

<性質・性格>の表現としては、たとえば、「質実剛健の気風」「やさしい印象」「強気の姿勢」「親切なところ」「楽な方向」「清楚な美しさ」などがある。この表現領域に出現する被修飾名詞「感覚」は、たとえば、「ユーモラスな感覚」「優美さの感覚」など性質や特徴をあらわす連体修飾関係を表すものである。被修飾名詞「感覚」は「恐怖の感覚」「痛みの感覚」など<感情・感覚>の表現もするため、<感情・感覚>の表現領域にも出現すべきであるが、データの未整理のために<性質・性格>の表現領域にしか出現していない。また「間」は、「忙しい間」など状態、状況などを表すと考えられるが、データの不充分さでうまく分類できなかった。

<範囲: 中2 域 分野 範囲 領域など>

<範囲>の表現には、「ユーモラスな中に情味をただよわせている」「常識の域」「科学的な分野」「合理的な範囲」「政治の領域」などがある。出現する連体修飾語群をみると、典型的なイ形容詞はほとんどなく、「的な」と形容詞性接尾辞をつけたナ形容詞が多く、また「名詞+の」の出現が多い。<範囲>の領域は、「中2」「域」と「分野」「範囲」「領域」とがやや分離している。「中2」「域」は例文からもわかるように<性質・性格>の表現と近く、「分野」「範囲」「領域」は<観点・見地>の表現と近いと考えられる。また、「才能」がこの語群の近くに位置している。「音楽の才能」「文学的な才能」など、「分野」と共通する表現が多いためであると考えられる。

<観点・見地: 面2 見地 立場 意味 側面 観点 背景 次元 意味合い 枠組み 枠 など>

<観点・見地>の表現領域には、「技術的な面」「財政的な見地」「否定の立場」「文化的な背景」「政治的な枠組み」などの例がある。また、「意味」「意味合い」「側面」などもこの表現領域に含まれている。たとえば、「精神的な意味での体質改善」「肯定的な意味合い」「教育的な側面」などがその例であるが、このことから、「意味」「意味合い」「側面」に、ある観点、立場を表明する意味機能があるのではないかと考えられる。この領域も、イ形容詞より形容詞性接尾辞「的な」を用いたナ形容詞や「名詞+の」の出現が多い。

1 「面1」は、「やさしい面」などの性質を表すので、ここではうまく分類できていない。

2 「域」は<範囲>を表すと同時にレベルも表す場合がある。たとえば「素人の域を出ない」など。<性質・性格>の表現領域の「身」も同様であるが、今回は<レベル>という表現領域は反映されていない。

＜様子：様相 気配 うち 空気 感情 様子など＞  
 ＜様子＞の表現領域には、たとえば「深刻な様相」「重苦しい気配」「不穏な空気」などの様相、雰囲気を表す表現がある。＜様子＞の表現領域に出現する「様子」は、様相・雰囲気を表すだけではなく、＜感情・感覚＞にも＜状態・状況＞にも近い。用例をみると、「感激の様子」「楽しみな様子」など感情の表現や「悪戦苦闘の様子」「有頂天な様子」などのように状態や状況の表現などで様子をあらわす場合もあるためである。このことから「様子」はこの三表現領域の語と、連体修飾語群の重なりが多いと考えられる。

＜その他：気象条件 悪条件 傾向＞

この領域では「気象条件、悪条件」「傾向」と2つにわかれるが、全体としてのこれらの位置付けがわからないので、今回は＜その他＞としておく。

#### 4. 名詞が形容詞的なふるまいをするとき

前節では、被修飾名詞の分類を論じてきたが、本節では、「名詞十の」形で用いられる修飾名詞の役割を形容詞との類似性に着目して論じる。

##### 4.1 「名詞十の」の分析にあたって

名詞が形容詞と似ている性格（例えば状態性の名詞など）のものは形容詞と類似する表現となりうるが、形容詞と似ていない性格（例えば具体名詞や動作性的名詞）のものが形容詞と類似する表現となる場合がある。例えば、連体修飾要素が形容詞の例として「危険な状態」をあげる。この例は、「危険な」があるものの状態を表している。他に、「乱雑な状態」「活発な状態」など、形容詞は状態を表現することができる。「名詞十の」が状態を表す例として、「無関心の状態」「水蒸気の状態」などがある。両者の「名詞十の」は「状態」を表すことが可能であるという点で形容詞と表現が類似している。しかし、「名詞十の」の名詞の意味的な性格は異なっている。「無関心の」は、「無関心」が状態を表す形容詞的な名詞なので、被修飾名詞に対してほとんどの場合、状態を表す。一方、「水蒸気の」は、「水蒸気」がある自然現象の一つを指し示す表現であるため、被修飾名詞によっては状態を表さない場合がある。例えば、

職場環境に無関心の経営者  
 水蒸気の力ですごいなと思いました。

などの例では、「無関心の」は経営者の状態を表しており、「水蒸気」は「力」に対して所有関係を表している。このように、名詞の性格によって、形容詞と常に類似するものと、場合によって類似するものがある。そこで名詞の性格別に、「名詞十の」の意味的なふるまいを分析する必要がある。名詞の種類には、単純語（一語からなる語）だけでなく、派生語、複合語などがある。コーパスは、主に新聞であるため、派生語、複合語は多い。単純語の場合にはその一語の性格で考え、派生語、複合語の場合には、語構成要素の後要素の名詞で判別する。名詞の性格の違いの判断は、形容詞と異なる性格をもつ名

詞を選り分けていくという考え方で、次のように行った。具体的には、まず、名詞（または複合名詞の後要素）がサ変名詞であるか否かによって分ける。形容詞には動作性的表現がないため、最初に動作性か否かを判別した。次に、形容詞は具体的な人や物、事態を指し示す表現がないため、具体名詞やまとまった事態を表す複合名詞などを選び分けた。以下に、「印象」という被修飾名詞と共に起す「名詞十の」を提示し、名詞の性格別の分類を整理する。

##### A. サ変名詞でない場合

- 1) 具体的なものを指し示す具体名詞  
 (複合名詞の場合は後要素が具体名詞)  
 古町 高級品 優良会社 冷夏 工業都市  
 反逆者 ヒノキ など
- 2) 状態などを表す抽象名詞(派生語もここに含める)  
 タカ派 気むすかし屋 受け身 正義感  
 無頓着 未消化 など
- 3) 動詞の連用形によって転成した名詞<sup>4</sup>  
 畑違い 寄せ集め イメージ作り ばらまき  
 温室育ち など

##### B. サ変名詞の場合

- 1) あるまとまった事柄を表す複合名詞になっているため、後要素がサ変動詞(「～スル」)にならない。  
 官僚主導 サービス改善 大幅削減 治安悪化  
 議論不足 など
- 2) 「～スル」を付けてサ変動詞になる  
 苦戦 冷遇 好転 熟慮 束縛 など

##### 4.2 「名詞十の」が形容詞的表現をするとき ＜性質・性格＞を表す表現を例にして

「名詞十の」の名詞が＜性質・性格＞の表現をする場合の条件としては、

- 1) 「名詞十の」の名詞自身が性質や性格の意味をもつ。  
 (→A-2, A-3)
- 2) 被修飾名詞の意味が介在することで性質、性格を表すことが可能。(→A-1, B-1, B-2)
- 3) 複合名詞の中の後要素が具体名詞であっても、後要素と被修飾名詞が意味的に上位一下位関係にある場合、複合名詞全体が性質や性格を表す。  
 (→A-1(複合名詞))

1) と 3) の場合は、「名詞十の」の名詞が、形容詞のように性質や性格の意味を表す。2) の場合は、「名詞十の」の名詞自身は形容詞的な意味を表さないが、被修飾名詞を具体的に表現することによって、形容詞と同様、性質や性格をあらわすことが可能になる。次に具体的に例をあげて説明する。

<sup>4</sup> 野村(1977)では、複合語の後部分の名詞の特徴は、状態性を表す相言類、「～スル」で表される用言類、「人間」「トマト」「文化」などの典型的な名詞である体言類からなっているとしており、全体としては、今回の名詞の性格別の分類にもあてはまる。

<sup>5</sup> 特に、複合名詞の後要素がサ変動詞でも「未、不、無、非」などの否定の接頭語がつく場合、結合形全体として形容動詞の語幹相当の品詞性を与えるため(野村 1977) 全体としては動作性がなくなると考えられる。

<sup>6</sup> 動詞が連用形になって名詞に転成すると、少なくとも動詞ではなくなるので、動作性のない分類の方に含める。

<sup>3</sup> 「感情」は、「空気」などに位置が近いが、「憧れの感情」「やりきれない感情」などのように心的な思いを表す表現が多いので、この位置でよいのかはわからない。あるいは「思い」や「気持」などのグループに含まれるかもしれないが、現段階では判断は保留にする。

- 1) 「名詞+の」の名詞自身が性質や性格の意味をもつ。  
(→A-2, A-3)

被修飾名詞「印象」と形容詞の連体修飾関係は、やさしい印象 無口な印象 穏やかな印象 などのように、ある人や物事の性質を表す。被修飾名詞「印象」と連体修飾関係になる「名詞+の」には、無頓着の印象 畑違いの印象 などのように、あるものの性質や性格を表すような名詞が共起する場合がある。形容詞のように性質や性格をあらわす名詞は、A-2の抽象名詞、A-3の動詞の連用形による転成名詞が多い。

- 2) 被修飾名詞の意味が介在することで性質、性格を表すことが可能な場合(→A-1, B-1, B-2)

連体修飾要素が、具体的な指示物をもつ具体名詞(A-1)や、ある事態を表す複合名詞(B-1)や、動詞性名詞(B-2)であっても、「印象」「気風」などの特徴を表す抽象名詞と結びつくことで、あるものの性質や性格を表すことができる。次のような例がある。

子供たちは、まっすぐ伸びるヒノキの印象がありました。

(ある会社は) 化学会社ということで一般の人には環境汚染の印象が強かった。

これらの例の場合も、子供たちの印象を比喩的に「ヒノキ」であると表し、ある化学会社の印象が「環境汚染」であると表している。「ヒノキ」や「環境汚染」が、文脈中の子供たちやある会社の特徴を具体的に表している点では、「名詞+の」は形容詞と類似した意味的な役割があると考えられる。しかし、「ヒノキ」も「環境汚染」も名詞自体には形容詞的な要素はない。形容詞には、具体的なものや事態を指し示したりする表現がないためである。実際、「おとなしい」は「あの人はおとなしい」のように直接的にある人の特徴をあらわすことができるが、「ヒノキの」や「環境汚染の」の場合は、「あの子供たちはヒノキだ」「あの会社は環境汚染だ」のように、「名詞+の」を直接的に文中の主体と結びつけて、主体の特徴を表すことができない。そこで、形容詞と意味的な性格が異なるこのような名詞の場合、それが主体の特徴であることを明示する必要があり、その役割を担っているのが、「印象」「気風」など特徴を表す抽象名詞であると考えられる。

- 3) 「名詞+の」の名詞が複合名詞の場合、その後要素が被修飾名詞と意味的に上位一下位関係にあるとき、複合名詞全体が性質や性格を表す。(→A-1)

次の二例を比べる。

工業都市の遊休地に着目しても不思議ではない。  
工業都市の北九州市でパソコン販売をはじめ、…。

これらの二例の「工業都市」は複合名詞の後要素が具体名詞の「都市」であることから、名詞全体としては具体名詞(A-1)に分類される。

前者の例では、「工業都市」と「遊休地」は所有者—所有物の関係である。所有者—所有物の関係は、端的に言えば、「都市」と「遊休地」が結び関係であり、「工業」は「都市」を修飾して特性を表している。つまり、この例の場合には、「工業都市」の後要素「都市」の意味に焦点があたって、「工業都市」が所有者として「遊休地」と意味的に結びつく。形容詞は、被修飾名詞との所有関係は

表さないで、この例の「工業都市」の意味的なふるまいは、形容詞とは異なる。

後者の例では、「工業都市」の後要素「都市」は「北九州市」と上位一下位関係にある。この例の場合、複合名詞「工業都市」の後要素「都市」の意味的性格より、都市を特徴づけている前要素「工業」に焦点が当てられ、工業が北九州市の特徴であることを表す。この例では、「北九州市は工業都市だ」のように、「工業都市」が直接的に主体(北九州市)の特徴を表すことが可能であり、表現が形容詞と類似する。このように、複合名詞の後要素が被修飾名詞の上位概念になっている場合、前要素の意味的な性格が強まり、複合名詞全体が、形容詞のように主体の性質や特徴を表す。類例としては、

高級品のダイヤ(品—ダイヤ)

優良会社のファミリーマート

(会社—ファミリーマート)

などがある。これらの例では「品」と「ダイヤ」、「会社」と「ファミリーマート」が上位一下位関係になっており、複合名詞の前要素である「高級」や「優良」の意味が強まる。このように、複合名詞全体が、形容詞的な表現になる場合がある。

## 5. 終わりに

名詞と形容詞では、品詞の点では異なるが、連体修飾用法の下で意味的なふるまいをするとき類似性をもつ場合がある。その場合は、形容詞と「名詞+の」の意味に接点が見られる場合であり、品詞が異なるからといって両者を区別する必要はない。しかし、連体修飾要素には、「名詞+の」でしか表現できない場合、形容詞でしか表現できない場合などがある。連体修飾要素の意味的なふるまいの整理という観点で、今後これらを大規模コーパスによって調査し、形容詞と「名詞+の」との意味的役割の類似と相違について明らかにするつもりである。また、被修飾名詞の意味マップを構築することで、名詞の有機的な結びつきを体系的に把握していきたいと考える。

### <参考文献>

- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味3』くろしお出版  
Y. Matsumoto (1997) *Noun-Modifying Constructions in Japanese*, SLCS 35, John Benjamins Publishing  
神崎享子 井佐原均 (1999) 「形容詞類の連体用法にみられる連用的な意味」 計量国語学, 22-2, 計量国語学会  
H. Isahara and K. Kanzaki (1999) "Lexical Semantics to Disambiguate Polysemous Phenomena of Japanese Adnominal Constituents" In *Proc. of ACL99*, 島津明 内藤昭三 野村浩郷(1986)「助詞「の」が結ぶ名詞の意味関係の解析」計量国語学, 15-7, 計量国語学会  
黒橋禎夫 酒井康行(1999)「国語辞典を用いた名詞句「AのB」の意味解析」情報処理学会研究報告, 98-NL-129  
馬青 神崎享子 村田真樹 内元清貴 井佐原均 (2000) 「自己組織型神経回路網モデルを用いた日本語意味マップの構築」言語処理学会第6回年次大会  
U. Hahn and N. Chater(1997) *Concepts and Similarity*, K. Lamberts, and D. Shanks ed. *Knowledge Concepts and Categories*  
野村雅昭 (1977) 「造語法」『岩波講座 日本語9 語彙と意味』岩波書店